

IV-7

都市景観の構成

ー長崎オランダ村ハウステンボス計画での試みー

(株)日本設計 正員 横松宗治

1. はじめに

長崎オランダ村ハウステンボスは、本年3月に誕生した。滞在型のリゾート都市として、施設や運営において様々な試みを行ったが、ここではこの街の都市としてのイメージを形成する上で最も主要な役割を果たす都市景観の構成について報告する。

ここで我々が試みた都市景観の構成手法は、近代以降採られている景観構成の概念とはかなり異なっている。

この報告では、まず近代的な景観概念とはどのような特徴をもっているかを考察し、つぎにこの計画において我々が採った、近代的な手法を超える試みとしての景観の構成手法を述べる。

2. 近代における都市景観の概念

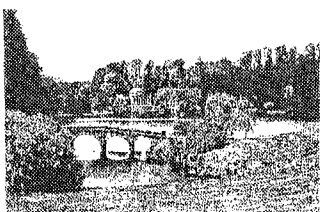
---- 「近代的景観概念」の特徴

2-1. 視覚的構成物としての「景観」

近代的概念としての「景観」は、景観認識の主体を設定し、その視野の範囲内での施設群などの安定的、美的構成を意味している。

例えば、「視野内での広がりー閉鎖感、積極的ー消極的、ポイント・バックなどの対比的構成」「ランドマークとしての塔状建築と、低層建築群とのバランス構成」など。

18世紀のイギリスにおいて発達した風景式庭園は、観察者の視点と視野を設定し、そのいわばヴィスタの中で「良き風景」の構成を求めたーこの意味では、風景式庭園における景観概念は、「近代的な」概念といえることができる。



風景式庭園の例
Stourhead/
Wiltshire, U. K.
18c. /H. ホーア

2-2. 都市機能の表現としての「施設形態」

都市のもつ諸機能を分析的に把握し、各々の機能の合理的な表現をもって、施設の形態とする。

例えば、「行政の中心、権威の表現としてのシティーホール」「合理性、機能性をイメージさせるオフィスビル」など。

2-3. 機能配置に対応したゾーニングによって施設群の景観をつくる

近代的都市計画は、ゾーニング手法に一つの特徴をもつ。つまり、都市施設の機能的グルーピングに応じた地域区分配置が基本になるものである。この配置原則によって形成された都市景観は、都市機能のイメージサインとも呼べるものになっている。

3. 長崎オランダ村ハウステンボス計画における景観形成の概念

本計画の都市景観の形成において試みられた手法や景観の概念は、近代的な手法とは著しく異なっている。

以下に、本計画の景観概念と計画手法について述べる。

3-1. 体験を通して再構築される「景観」

「都市景観」は、都市体験ー街を歩く距離、無数の場所からの眺め、朝から夜中までの、四季の景色の変化ーを通じて市民のなかに共通の認識として形成される。

3-2. 「時代」「様式」が重層的にみえる景観

一般に都市は、その形成に数百年、ときには千数百年を要している。その間に都市機能も、形態的な様式も変遷を経ている。

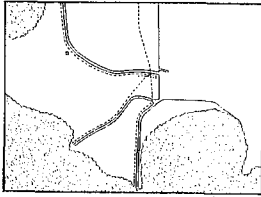
つまり一つの都市の中に、長い時代と、幾つかの様式を同時的に、重層的に包含している。そしてその都市特有の、時代と様式の組み合わせの中に、そ

こでの都市景観のアイデンティティーを観察者の内面に形成するのである。

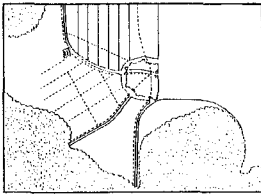
3-4. 「都市形成史」を計画手法とし、都市固有の都市景観を形成する

本計画のタウンプランニング上の特徴は、オランダ諸都市の歴史的形成過程をモデル化し、この(架空の)「都市形成史」を計画手法としたことにある。

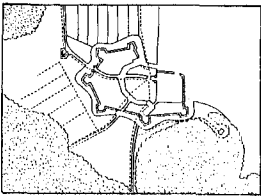
以下に、本計画での「都市形成史」を述べる。



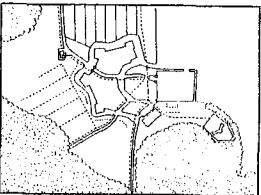
12世紀——
川の河口に漁村が生まれ、上流には石造りの家が建ちはじめます。やがて、川に沿って道ができ、農業も開始されます。



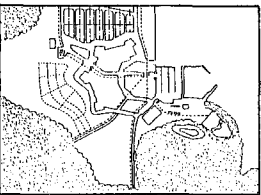
12～14世紀——
漁村には、内港と外港ができ魚市場もつくられます。街の中心地には教会と市役所が建てられます。郊外の低地は干拓され、森や牧草地等として整備されます。さらに、外敵から街を守るため、城壁やゲートがつけられます。



14～17世紀——
街は発展を続け、古い城壁の外側に新しい城壁がつくられます。17世紀の黄金時代には港はさらに拡大され東インド会社の倉庫群や大型市場などが次々に建てられます。さらに市街地には貴族の館や新しい教会などが建てられます。



19世紀——
工業が発達し、運河が張りめぐられ、港はさらに大型化します。街には駅ができ、鉄道が走ります。城壁はその役割を終え、その外側にも民家ができます。



20世紀——
郊外の環境も整えられ、別荘地もつくられます。旧市街地、マリナーナ、ドック、浜辺、駐車場などが整備され、快適な住空間がかたちづけられます。自然を破壊することなく、自然と調和した新しい街をつくる(ハウステンボス)の誕生です。

それぞれの都市がもつ「形成史」が、その都市固有の都市景観を形成することになる。

4. 本計画の景観を構成する要素

しばしば主観的に扱われがちな「景観」を、その構成の最小単位(要素)から、複合され、再構成された一つの集合概念としての「景観」の意味を考察する。

4-1. 単位景観

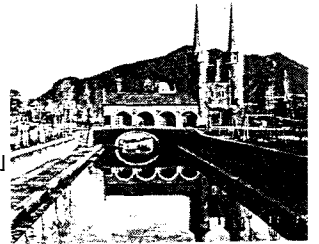
都市を構成する基礎単位であるが、都市景観の認識単位としては独立しては存在しない。

例えば、「建築物(街路に面するファサード)」「街路(路面)」「運河(水面)」「橋」など。

4-2. 視覚(視野)景観

一観察者の一視野に、同時に捉えられる景観であり、通常「景観」はこの意味で使われる。

例えば、一視点場からの「建築ファサード—路面—水面—橋」、「海面—栈橋—広場—ファサード」など。



4-3. 複合景観

体験を通じて、そして共同で構築する「景観」。

例えば、「田園—市門—街路—広場」、「運河—水門—港—海」など観察者の一連の行動によって認識された一つの「景観グループ」。

5. おわりに —都市のイメージ形成への試み—

このような「脱近代的な」都市景観の形成手法は、都市スケールでは、我々にとって初めての試みであり、十分な成果が得られたか否かは、この街を訪れる人々の批判、批評をまつしかない。

さまざまな分野で、近代合理主義の限界と、これを超えようとする努力がなされているが、我々のこの試みもまたその一部となることを期待している。

最後に、本計画に対し、長期にわたり貴重なアドバイスを続けていただいたオランダ国・Grontmij社 Ir. Pieter Bakker 氏、長崎大学 富樫宏由教授に心から感謝いたします。